

「水飲み鳥」

私たちは高校の同級生だった。  
演劇部だった。

森 隆志（モリタカシ） 地元 県立高校教師

磯部雄太（イソベユウタ） 追われている

小林紀子（コバヤシノリコ） 東京 劇団所属

山下奈津子（ヤマシタナツコ） 地元 主婦（子供あり）

そして、おととい死んだ、長田恭子（ナガタキョウコ） 地元

この5人が同じ学年だった。

私たちは今年みんな40歳になる。

あつという間に高校を卒業して22年がたって、  
あたり前だけど、それぞれが、それぞれの人生を生きている。

長田の死がきっかけで、こうして会うことができた。

長田は、会社の帰りに、家のすぐ近くの幹線道路で、  
対向車線をはみ出した大型のトラックと正面衝突した。

言うまでもないけど、長田にはなんの責任もない。  
だけど、死んでしまった。

長田は、

まあいいか、この話は後でどうせ出てくる。

とにかく、私たちは、こうして今夜、集まった。  
葬式の後、場所は、僕の自宅だ。

じゃあ、始めるとする。

夕方5時くらい。1月くらい。森の家。  
8畳ほどの部屋に、畳が敷いてある。  
周りには、布団が無造作に畳まれていて、乱雑な印象。  
喪服姿の森と、小林が立っている。

森　なんか・・・ごめん。

小林　なんで謝るの？

森　想像以上に汚かった。

小林　いいわよ。

森　まあ、座ってよ。

小林　うん。

森　（部屋が汚くて）しかし・・・まいったな。

小林　ほんと、気にしないで。突然だったし。

森　まさか、こういう展開になるって思ってたなくて。

小林　私の部屋もこんな感じだから。

森　池袋だっけ？

小林　から20分くらいのところ。石神井公園ってところ。

森　公園？

小林　公園が駅のすぐ前にあるから。

森　大学からずっと？

小林　なんか面倒で。引越しとかするの。だからもう何年？数えたくもない。

森　（苦笑）

小林　あんまり実感ないね。

森、車のキーを机に置く。

森　ちよっと着替えるね。

小林　ああ、うん。

森、喪服の上着を脱ぎ、ハンガーにかける。  
ネクタイを緩め、ワイシャツのボタンを外す。

小林　え？ここで？

森 駄目？

小林 いや、いいけど。じゃあ、一応、あっち向いてる。

森 別にいいけど。

小林 いや、一応。

森、急いでズボンを脱ぎ、部屋に着替える。

小林 もういい？

森 まだ。

とって、急いで干しっぱなしの下着を取り込み、布団の間に挟む。

小林 ・・・どうかした？

森 なんでもない。

森、片隅に重ねてある成人向け雑誌を目につかないところへしまう。

小林 もういい？

森 もういいよ。

小林、振り返り、

小林 なんか、まずいものでもあった？

森 ただの身だしなみです。

小林 そうですか。

森 なんか飲もうか。

小林 あ、私、やるっか。

森 いいよ、座ってて。

森、そう言うと退場。

小林、部屋を見渡す。

すぐに、ペットボトルのお茶と、コップを2つ持って、森が来る。

森 (お茶をコップに注ぐ)

小林 あのさ、

森 なに？  
小林 (おもむろに) 塩って、  
森 塩？  
小林 お寺でもらう塩。  
森 ああ。  
小林 あれって、清めるんだよね？  
森 ・・・たぶん。  
小林 何から？何から清めるの？  
森 どうだろ。変な霊がまとわりつかないように？  
小林 それは、お化けみたいなもの？  
森 お化けっていうか、まあ、宗教的な問題でしょ。  
小林 じゃあ、キリスト教とかは、やらない？  
森 たぶん。なんで？  
小林 なんかも、こっちの世界に帰ってきましたって感じがして、ちょっと違和感あつて。  
森 ・・・ちよっと、調べようか。  
小林 いいのいいの。別に、ただ思いついただけだから。  
森 いやあ、気になるし。それに、生徒に話すネタにもなるかもしれない。

森、傍らに置いてあるパソコンを触りだす。

小林 ・・・どう？仕事。  
森 まあ、ぼちぼち。  
小林 中学校だっけ？  
森 そうだよ。  
小林 なんかも、部活とかやってるの？  
森 一応。  
小林 何部？  
森 コンピューター部。  
小林 なんかも、中学生が青春のすべてを捧げる感じじゃあ、なさそうね。  
森 週一回だけ、放課後集まって適当に。毎年うまく逃げてる。運動部の顧問とか。  
小林 そうなのって、選べるの？  
森 まあ。  
小林 へー・・・やっぱり先生って呼ばれる？

森 先生だからね。  
小林 ふーん。  
森 なんだよ。  
小林 なんか、変。  
森 普通だよ。  
小林 今日、ご両親は？仕事？  
森 ふたりとも死んだ。  
小林 ？  
森 おふくろは、小学校2年のときに。親父も2年前に、胃がんで亡くなった。病気自体は、高校の頃から分かっていたし、それなりに覚悟み  
たいなものもあつたし。  
小林 全然・・・知らなかった。  
森 あんまり、家族の話なんてしないしね、高校生の時は。  
小林 ・・・・そうだね。  
森 （記事を読みながら）だから、今はここにひとり住んでる。実家だ  
けど、家族はいない。ただの一人暮らし。  
小林 ・・・・  
森 （記事を読んで唐突に）へー。いや、塩、なんか神道から来た、日本  
古来の習慣だつて。  
小林 そうなんだ。  
森 （読み上げ）「神道では、死をケガレであり、不浄なものということに  
なっていた。それゆえ、身を清める意味で塩を用いた。しかし最近で  
は、死は決してケガレではないとし、宗派によっては、やめる動きも  
盛んである」・・・お袋が死んだとき、親父と一緒に、玄関でこうして  
お互いに塩かけあつたの、今でも覚えてる。「さあ、お前も塩を、ふれ  
でないと、かあさんも天国に行けないぞつて」全然違つよな。  
小林 ・・・・本当だね。  
森 暑くない？  
小林 大丈夫。  
森 クーラーないんだ。何度も直訴したけど、親父が嫌い。結局、今も  
なんだかんと言つて、つけてない。  
小林 私も、あんまり好きじゃないよ。  
森 でも、あるでしょ？その、公園の部屋には。  
小林 石神井公園ね。  
森 そうそう、そのシャクジイ公園の部屋には。

小林 あるけど、あんまり使わない。電気代もかかるし。  
森 そう。  
小林 まあ貧乏人ですから・・・  
森 今日は？実家、泊まるんでしょ？  
小林 まあ、そのつもり。  
森 明日は？  
小林 一応、休み。というか、休むって電話した。いいのよ。別に。一人、  
森 いろいろがいがまいが、関係ない。世界はそれでも回るのよ。  
小林 なにそれ。  
森 昔、やった芝居の台詞。  
小林 覚えてるもん？  
森 全部は無理だけど、いくつかは。  
小林 好きなの？その台詞。  
森 別にそういうわけじゃないけど。不思議と忘れないものってある。  
小林 そうなんだ。  
森 あとは、「この、クンチン野郎！」とかね。忘れたくても、忘れられないよー。寝言で言ったら、どうしよう。  
森 「クンチン野郎」がどんな芝居だったのか興味あるけど。  
小林 それが、内容は全然覚えてないんだよね。  
森 なんだそれ？  
小林 面白いでしょ？  
森 まあいいや。  
小林 ねえ、私も着替えていい？  
森 どうぞ。  
小林 じゃあ、あっち向いてて。  
森 ああ、うん。  
小林 ・・・いやだ、冗談よ、冗談。  
森 え？  
小林 ごめん。冗談。  
森 ああ、そう。なら、あっちの部屋、使って。  
小林 ありがとう。  
森 いいえ。

小林、ポストンバックを持って、退場。

森、お茶を一口飲む。  
部屋を見渡し、他にもなにかまづいものはないか、チェックする。  
そのとき、無造作に置かれた小林のバッグが目に入る。  
その存在が、小林がここにいることの唯一の証明であるかのように見る。  
決して触らないが、口の大きく開いたバッグの中を覗き込む。  
色々な角度から・・・  
小林、やがて着替えて戻ってくる。

小林 どうかした？

森 ん？

小林 ？

森 いや、メールが来てたかも。

小林 そう？

小林、バッグの中の携帯を取り出し、確認する。

小林 来てないよ。

森 そう？

森、座って、お茶を飲む。

小林 初めてみた。森くんのお父さんとお母さん。

森 写真？

小林 うん。

森 遺影だから、ずいぶん印象違うけどね。

小林 いやあ、似てるよ、やっぱり。

森 そう？

小林 そっくり。

森 そうかなあ。

小林 (お茶を飲みながら) 訊いてもいい？

森 どうぞ。

小林 どうやって、事故のこと知ったの？

森 これ。インターネット。

小林 そうなんだ。

森 なんとなくローカルのニュースを見ていたら、ふと飛び込んできたん

だ。あいつの名前が。長田恭子さんが死亡した。帰宅途中の事故だった。トラックが対向車線をはみ出したって。運転手は、業務上過失致死の現行犯で逮捕。警察は脇見運転と見て、現在、取調べをしている。何の連絡も取ってなかった。私。

森　　そうか。

小林　森くんは？

森　　まあ、何度か。

小林　どこで働いてたの？

森　　日清の工場。

小林　日清？

森　　カップヌードルの日清。何年か前にできたんだよ。でっかい工場が。そこで、毎日、カップヌードル作ってた。

小林　会計事務所は？たしか目指してたんだよね、会計士。

森　　そうだよ。だけど、なかなか試験にパスしなくて、人間関係もうまくいってなかったみたいでね。

小林　・・・そうか。

森　　つまらない人生だったろうな。

小林　え？

森　　地元の短大出て、会計士諦めて、毎日カップヌードル作って少ない給料のほとんどを家に入れて、最後は知らない奴に殺された。

小林　意味がわからない。なぜ、そんな風に言うのか。

森　　そう思わない？

小林　だって、そんなの、分からないじゃない。人の幸せなんて、誰にも分からないじゃない。

森　　それも何かの台詞？なんか、真実味ないよ。

小林　違う！本気で言ってる。

森　　本当に？哀れむ気持ち、少しもない？

小林　ない。

森　　・・・ごめん。違う。こんなこと、言うつもりなかった。ただ、ちょっとショックで。葬儀の最初から、ずーっと手伝ったりしてたから、色々な人に連絡したり、色々な涙、見過ぎて、ちよっと、うまくまだ整理がつかなくて。葬式には慣れていたつもりだったけど、親の死とはまた違う意味で、きつかった。忘れて、今の。

小林　いいの、こちらこそ。

森　　いろいろ話すべきことはあるんだろうけど、今はまだ、久しぶりすぎ

小林  
で、なんていうか、距離感がつかめない。  
・・・なんか、急に哀しくなってきた。

沈黙。

森  
小林は？

小林  
なに？

森  
最近、

小林  
色々考えるよ。将来のこととか。

森  
劇団は、給料、出るの？

小林  
でない。

森  
一円も？

小林  
一円も。

森  
そうなの？

小林  
でも、最近は、ボチボチ、映像の仕事とかあって、だから、いつかね、

森  
へー、テレビとか出てるの？

小林  
テレビっていうか、テレビはまだ無理なんだけど、なんかインターネット

ツトでね、ドラマみたいのやってて、それにちょっと出たり。

森  
すごいね。

小林  
別にすごくないよ。

森  
ってことは、今も見られる？なんて名前のサイト？

小林  
いいよ、今は。なんか恥ずかしいし。

森  
(変) いいか、こうやって応援する人間、大切にしないと駄目だぞ。

演歌歌手を見てみる。ひとりひとりのファンを大切にしなくちゃ。

小林  
だけど、今は、ほんと勘弁して。

森  
わかったよ、わかった。

小林  
もう・・・いじめないでよ。

森  
でも、お前が今も演劇続けているなんてな。

小林  
他にやること思いつかないだけ。

森  
それでも。

小林  
森くんだって、

森  
ただの中学の教師だよ。

小林  
いいじゃない、なんか、

森  
定年まで、同じ毎日が続くだけだ。

小林  
そんなことないよ。

森 うらやましいよ。小林のこと。  
小林 私だって、なんか、尊敬するよ、森くんのこと。  
森 ・ ・ ・ (笑って) なんだよ。褒めたたえあってないか？お互い。気持ち悪い。  
小林 (笑って) そうね、それもそうね。  
森 本当だよ ・ ・ ・

沈黙。

森 彼氏とかいるの？  
小林 森くんは？  
森 いない。  
小林 そう。  
森 いるの？  
小林 いるよ。  
森 へー。年上？  
小林 2コ下。  
森 劇団の人？  
小林 ・ ・ ・ うん。  
森 へー。  
小林 うん。  
森 長いの？  
小林 もう4年かな。  
森 長いね。  
小林 そうだね。  
森 なんか、綺麗になった？  
小林 なになに。急に。  
森 いや、そうかなって。  
小林 知らないよ。  
森 嬉しい？こういうこと言われると。  
小林 いやだ、からかっているの？  
森 違うよ。ちよっと本当にそう思った。  
小林 嬉しくないわけじゃないけど。  
森 彼氏、好き？  
小林 ・ ・ ・

森 なに、今の間。

小林 え？

森 ああ、なんか微妙だな？今の沈黙。違うって。いきなり振られたから。

小林 いきなりだから、本音が出るんだよ。

森 もう、いじわる。いいでしょ、別に。

小林 いいよいいよ、ごめん。

小林 もう……

森、横になる。

小林 ……ねえ、

森 なに？

小林 嘘っていけないことかな、

森 嘘？

小林 どう？先生。

森 人は嘘をつく生き物だからね。嘘は毎日つくものだよ。

小林 それは、嘘をついてもいいってこと？先生。

森 先生はやめてよ。

小林 先生でしょ。

森 ま、中学生には、嘘をついてもいいとは言えない。だから、嘘はいけ  
ないと教える。嘘は、人の信用を失い、君たちを孤立させるって言う。

小林 ひとりの人間、森としてはどうなの？

森 そうだな。大きな嘘は罪にならないかもしれない。だけど、細かい嘘  
の積み重ねは、それ以上に罪になるような気がする。

小林 ……今日は、嘘、ついてもいいことにしない？  
森 なんて？

小林 だって、本当のことばかりじゃ、疲れない？「ああ、こいつ、ちよつ  
と大きさに言っているな」とか「この話嘘だな」って思っても、それ  
を詮索しないこと。

森 そんなこと、する必要ないよ。

小林 そうかなあ。

森 だって、仲間でしょ？

小林 ……そうかな。

森 ……どうしたの？

小林 別に。

森 嘘なんて、必要ない。僕たちには、嘘はいらない。

小林 きっと？

森 そういうの、信じようよ。

小林 ピュアなのね。

森 濁ってるの？

電話がかかってくる。

森 もしもし。ああ、うん、いるよ。そうか。大丈夫。いや、まだ。電話  
してみるよ。たぶん、線香あげてからになると思うし。そうか。わか  
った。気をつけてな。

電話を切る。

小林 奈津子？

森 子供がちよっと風邪気味で、旦那が帰ってこないと出掛けられないっ  
て。

小林 そっか。まだ、実物見てないな。奈津子の子供。

森 ああ、太郎くん。

小林 いくつになるんだっけ？

森 来年、小学生だから、5歳？

小林 もう5年もたつんだ。

森 ああ。

小林 すごいね。

森 ちよっと障害があってね、

小林 え？

森 普通学級は難しいってことらしいんだけど、奈津子は、無理してでも  
通わせたいって。

小林 はじめて聞いた。

森 分かったのが最近だったから。

小林 なんて、黙ってたのかな。

森 そうじゃないだろ。

小林 だって、年賀状にはなにも・・・

森 別に、他意はないよ。

小林 一言、言ってくれてもいいのに。  
森 それでどうするの？電話するの？  
小林 子供のこと、友達に話すのって、普通でしょ。  
森 それは、小林の価値観だ。  
小林 なんかも、ものすごく遠くで暮らしているみたい。私。  
森 たまたまだよ。  
小林 じゃあなんで森くんには話すの？  
森 それは、相談に乗ったから。小学校の件で。俺もはじめてその時、知らされた。  
小林 ……  
森 訊けばいい。本人に、訊けばいい。なぜ教えてくれなかったんだって。だけど、もし小林だった、わざわざ言うか？ウチの子がやけどをした、ウチの子の奥歯が生えた、ウチの子にムカツクって言われたって。  
小林 ……  
森 (変) それって、逆に差別してない？  
小林 子供、いないから分からないよ。  
森 役者でしょ？いないから分からないなんて。医者じゃないから、医者の役はできませんって言うくらい、馬鹿げてる。  
小林 ……向いてないのかな。  
森 さあ、それは分からないけど。  
小林 もともと、役者なんて向いてないのかも。実家とか帰りずらいんだ。基本的に、親とか、あんまりよく思っていないし。もう30なんだから、好きなこと堂々とやればいいって思うんだけど、好きだけじゃ、やっぱり続けられない。  
森 好きなことをやることができるって、すごく羨ましいけど。  
小林 もちろん。だけど、生活ができて、はじめて認められる。  
森 生活するために人生があるわけじゃない。  
小林 ……そうだけだ。  
森 まだ諦めるのは早いような気がするけど。  
小林 そう言えるのは自信があるから。  
森 別にそんなのない。  
小林 ……でもなんか嬉しいよ。励まされたみたいで。  
森 励ましてるもん。  
小林 恭子、可哀相。本当に、可哀相。  
森 ……ちよっと、やめてよ。

小林 だって、もう二度と未来の話もできないなんて、可哀相だよ。  
ふたり、しばらくそのまま。

小林 ごめんね。

森 大丈夫。

小林 (変) 疲れてるのに。昨日からずっとでしょ？

森 奈津子も色々手伝ってくれた。

小林 寝てないんじゃない？

森 大丈夫。

小林 ……

森 小林も、ありがとな。今日は朝から来てくれて。

小林 本当はお通夜にも行きたかったんだけど、

森 仕方ないよ。あんな時間だったし。

小林 稽古中で、携帯の電源切ってたから。

森 次はいつなの？公演。

小林 来月。

森 どんな芝居？

小林 ……お葬式の話。

森 そう。

小林 だから、喪服も持ってたの。本番用を買っていて。

森 なんか、タイミングいいね。

小林 よくないよ、こんなタイミング、よくなくていいよ。

森 ……

小林 本当に覚えてるんだよ。あの頃のこと。今でも。支えてるんだよ、私を。本当だよ。

2

夜の7時くらい。

主のいない部屋。小林がひとりている。

しばらくして、声。

山下 遅くなりましたー。

小林、山下が来たのだと分かり、玄関へ。  
やがて声。

小林 いらっしやい。

山下 森くんは？

小林 磯部くん迎えに。

山下 そうなんだ。

やがて、姿が見え、

小林 どうぞ、どうぞ。

山下 どうも。

山下、森の部屋を一瞥し、

山下 散らかってるなあ。

小林 まあ。

山下 ひどいなあ。あ、これ、梨。近所の人 gave たって、うちの母親が。  
小林 おいしそう。

山下、座る。

山下 なんか、疲れたね。今日は。

小林 お疲れ様。

山下 いや、紀子も。遠くから。

小林 いえいえ。

山下 いつも案内もらってるのに、行けなくてごめんね。公演。

小林 いいのいいの。あれ、近況報告だから。

山下 東京にも行ってみたいんだけど。子供いると、やっぱり。

小林 そうだよな。

山下 なんか、森くんの家に、私たちだけって、微妙だよな。くつろいでい  
いんだか、悪いんだか。

小林 ・・・そうだね。

山下 夕食は？

小林 まあ、適当に。

山下 これ、食べる？

小林 ああ、そうしょつか。

山下 台所は？

小林 ああ、私、持ってくるよ。

山下 私も、手。

山下も、小林の後に続き、姿消える。

しばらくして、山下、包丁を持って登場。

小林 洗わなくていいかな？

山下 いいでしょ。このままで。

山下、梨の皮を剥き始める。

山下 あ、持ってきたよ、アルバム。見る？

小林 うん。

小林、思い出のアルバムのページをめくる。

山下 でも、すごいね。ずーっと東京で。

小林 すごくないよ。奈津子こそ。

山下 別に。平凡なだけの毎日。

小林 そんなことないよ。

子供だけが成長して、私たちはただ老いていくのかって。そのうち、親だっていつか元気がなくなるし。日曜日になると、何をしたいのか、分からなくなるときがある。そして思いついて買い物に行けば、駐車場は満車、店内は人だらけ、町中の人が同じことを考えているんだって思う。何を考えて、どこへ向かおうとするのか、自覚しておかないと、たぶん何も変化しないで、時間だけがたっていくのかって。

小林 同じ。

山下 同じじゃないよ。全然。たぶん。ものすごく退屈だと思うな、私の日常。だって、こうして今、森くんの家で梨剥いていることなんて、今年一番のイベントだって思ってるもん。

小林 . . .

山下 はい。

山下、小林に、梨を渡す。  
小林、梨を食べる。

山下　せめてね、子供っていうのが、私の存在意義だって、旦那と家族でいるって証拠、ほら形がないでしょ、家族だとか、そういうのって。だからクサビなんだ、きつと。私とか、私たち家族が家族としているためのクサビ。

小林　それは、信頼すべきこととか、そういう意味だよね。

山下　うん、そんな感じ。

小林　ないかも。ないから、焦ってるのかも。

山下　ないってことはないよ。あるんだよ、それは。

小林　あるのかな。

山下　ある。必ず、ある。

小林　うーん。

山下　子供の写真、ないの。

小林　見る？

山下　見たい。

小林　（携帯を渡す）大きくなったねー

山下　来年もう小学生だからね。

小林　かわいいねー

声がする。

森　奈津子！いる？

山下　いる！

森　車、ちょっと動かして。あそこだと、隣が出られないから。

山下　はい。

山下、鍵を持って、退場。  
声がする。

山下　久しぶり。

磯部　ああ、うん。

森　まあ入ってよ。

磯部 ああ。

磯部が、部屋に入ってきた。

磯部 久しぶり。

小林 ああ。

磯部 元気だった？

小林 まあ。

磯部 東京で芝居やってるんだって？

小林 一応。

磯部 そうか。

小林 磯部くんは？

磯部 まあ、

小林 元気？

磯部 ああ、元気だよ。

小林 どうぞ。(と座るように促す)

磯部 ああ、うん。

磯部、座る。

磯部 今日来たんだって？

小林 そう。朝一の新幹線で。

磯部 突然で驚いたよ。

小林 そうだね。

磯部 うん。

森、コンビニの袋に入ったビールを持って、登場する。

森 これ、買ってきた。

小林 おお、ビール。

森 飲もうよ。ちよっと。

小林 そうだね。

森、落ち着こうとするが、山下の音がする。

山下　ちよっと、森くん！

森　なに？

山下　見てくれない？車。なんか、暗くて、川に落ちそうなんだ。

森　わかった！・・・ちよっと、適当に飲んでよ。

森、いなくなる。

小林　磯部くんだけ、連絡取れないって言ってたから、よかったよ。

磯部　たまたま新聞で見て。

小林　そうなんだ。

磯部　みんな集まるっていうから、久しぶりに。親も今は他の場所にいるから、本当に久しぶりなんだ。ここに来るのは。

小林　私もそう。久しぶりに帰った。

磯部　なんか、変な感じだな。

小林　変って。

磯部　いや、だからその、まあ、なんかな。

小林　ああ。

磯部　飲もうか。

小林　あ、でも。

小林、自分たちだけ先に始めることに、ちよっと抵抗。  
磯部、そんな小林に構うことなく、プルタブを開ける。

磯部　はい。(とビールを渡す)

小林　ああ、

磯部　じゃあ、えーっと「乾杯」じゃないな。

小林　じゃないよね。

磯部　そうだな・・・再会を祝って。

小林　そうだね。「乾杯」・・・あ、言っちゃった。

お互いに、一口ずつ飲む。

小林　恭子のところ、行ってきた？

磯部　ああ。線香あげてきた。

小林　そっか。

磯部      両親は辛いだろうな。  
小林      そうだね。  
磯部      ・ ・ ・ ま、保険金もそれなりに入るだろうけど。結構、入るんじゃないかな。3千万くらい。いや、30だからな、もったかな。知ってる？金額の算出方法って。あれ、結構、面白いんだよな。  
小林      そうなんだ。  
磯部      昔、ちよつとやってたことあって。  
小林      今も東京？  
磯部      まあな。  
小林      私も東京にいるのに、結局、卒業してから一回も会わなかったね。  
磯部      ああ。  
小林      そうなんだあ。  
磯部      いくら包んだ？  
小林      2万円。  
磯部      そうか。  
小林      磯部くんは。  
磯部      まあ、そんなもん。  
小林      ・ ・ ・  
磯部      劇団って、いくらもらえるの？  
小林      劇団からは出ないよ。  
磯部      (驚いて) じゃあ、どうしてるの？  
小林      アルバイト。  
磯部      なんの？  
小林      派遣。  
磯部      なにしてるの？  
小林      今は電話のオペレータ。保険会社のお問い合わせ窓口やってる。  
磯部      大変なんだな。  
小林      そんなに大変じゃないよ。  
磯部      ・ ・ ・ 長田って、何やってたの？  
小林      あ、なんか、カップヌードル、作ってたんだって。  
磯部      工場かなんか？  
小林      うん。  
磯部      じゃあ、3千万もいらないかもな。いや、保険金ってな、計算するとき、仕事も重要になるから。生涯賃金って見積もるわけ。つまり、この人が、死なずに働けば、どのくらい稼ぎがあったかって。

問。

磯部 今日さ、遺影見て、ようやく顔思い出したよ。長田の顔。覚えてた？

小林 うん。

磯部 すっかり忘れてた。

森と、山下、やってくる。

山下 お、ビール。

磯部 お先に。

山下 どうぞ、どうぞ。

森 じゃあ、とりあえず、乾杯、というか、

山下 そうだね。

森と山下、お茶を用意する。

磯部 飲まないの。

森 紀子、送ってかなくちやならないから。

山下 あ、いいよ。私、送ってくから。

森 そう？

小林 大丈夫。私、適当に帰るから。

森 どうやって。

小林 タクシーとか。

山下 いいって。私、飲めないし。私送ってくから。

森 そう？

山下 ほんと。

森 じゃあ、お願いしちやおうかな。

小林 ごめんね。

山下 いいのいいの。

森 じゃあ。

森、ビールをあける。

森 なんにもないな、つまみとか。

山下 後で買ってくるよ。適当に。

森 そうだな。

山下 うん。

森 じゃあ、磯部・・・乾杯。

磯部 森、やってよ。

森 そう。じゃあ、まあ、みんな久しぶり。

山下 久しぶり！

小林 ほんとだね。

森 長田が今日はみんなを集めてくれたのかもしれない。

山下 4人だけの、お葬式だね。

森 そうだな。

山下 今日は、私たち、いっぱい、あなたのこと、思い出します。

森 ・・・・それじゃあ。

静かに杯を合わせ、それぞれ一口ずつ飲む。

3

数時間後。

ビールの空き缶、日本酒の瓶、スナック菓子の袋、などが散乱している。

磯部と小林が部屋にいる。小林は酔いつぶれて、横になっている。

やがて、山下が入ってくる。

山下 あれ。

磯部 ちょっと寝るって。

山下 そう。

磯部 なんだよ、ふたりでこそこそ。

山下 ああ、

磯部 なに？

山下 ちょっとお客さんが、

磯部 客？誰、こんな時間に。

山下 恭子と付き合ってた人だって。

磯部 ほんと？

山下 うん。

磯部 何しに。

山下 分からない。森くんが、声掛けたみたいで。  
磯部 それで？相談されたってこと。  
山下 うん。

磯部 ここで話せばいいのに。  
山下 まあ、そうだよな。

磯部 ほんとだよ。  
山下 ちょっと片付けようか。

二人、片付け始める。

磯部 森は。

山下 待ってる。

磯部 もう来てるの？

山下 近くまで来てるみたい。

磯部 起こしたら、小林。

山下 そうね。

山下、小林を起こす。

山下 ちょっと、起きて。

小林 ・・ん？

山下 お客さん。

小林 お客さん？

山下 いいから、ちょっと起きて。

小林、ぼんやりと起き上がる。

小林 もうおしまい？

山下 お客さん来るの。

小林 誰？

山下 恭子と付き合ってた人だって。

小林 え？

山下 もう来るから。

小林 なんで？

山下 いいから、ちょっと手伝って。

小林 はい。

しばらくして、森。

森 ちょっとお客さんです。

長田恭子の恋人だった、増田淳史がやってくる。

増田 すいません。夜遅く。増田と申します。

森 どうぞ、座ってください。狭いところですが。

増田 すいません。

増田、座る。

森 みんなも、座ろうか。

増田 突然、申し訳ありません。今日を逃すともうお会いする機会もないと思っ  
て、無礼を承知で伺いました。すぐに帰りますので。

森 山下奈津子です。

増田 こんばんは。

山下 山下です。

森 それに、小林？おい、小林？

小林 ・・・小林です。

森 ごめんなさい。

増田 いえ、お気になさらず。

森 あと、

磯部 磯部です。

森 このメンバーが、長田さんと一緒の学年でした。

増田 そうですか。

森 はい。

増田 ・・・出会って2年になるところでした。何度か、みなさんのことが  
話題になりました。彼女にとって、高校時代がとても楽しかったみた  
いで、いつもとても楽しそうに話していました。

山下 ほんとうにご愁傷さまです。

増田 いえ。

森 彼女も、通夜からずっと、色々と手伝ってくれて。

増田 そうでしたか。ありがとうございます。実は、通夜にも葬式にも出ていないんです。

磯部 どうしてですか。

増田 事情があつて。

磯部 どんな？話したくないことですか。

森 後で話すよ。

磯部 知っているのか。

森

森 まあ、

増田 恭子さんのご両親から、反対されてたんです。

山下 それは、お付き合いを？

増田 はい。

山下 なぜですか？

増田 ・ ・ ・

増田 せめて線香をとも思っていたんですが、まだ。

小林 よっぽど何かあったんでしょ？浮気したとか。

山下 紀子。

小林 だって、好きな人が亡くなったっていうのに、線香の一本もあげられないなんて。

山下 ちょっと、やめなつて。

増田 ・ ・ ・

磯部 まあ、そうだよな。

小林 そうだ、そうだ。

山下 絡むなつて。

小林 絡んでないよ。全然、普通。だって、一番近くにいる欲しい人でしょ？恭子にとつて。違う？それなのに、いくら反対だからつて、線香もあげさせないなんて、恭子の親も親よ。

増田 僕がいけないんです。仕方ないと思います。

磯部 それは、どうして。

増田 ・ ・ ・

磯部 話したくないことですか。

小林 話してよ。聞くから。

増田 ・ ・ ・

森 ほんと、無理なくて。

増田 …あの、僕、同級生を殺めて（あやめて）しまったんです。まだ、中学生のときでした。黙っていればよかったんですが、真剣になればなるほど、隠していることが辛くなって話したんです。お互いに結婚を考えるようになって、それで両親にも、僕の過去を話してくれました。きつとわかってもらえるって、そう言ってくれました。だけど、やっぱりそれほど甘いものではありませんでした。時間をかけて、わかってもらえばいいって、そんな話をしたんですが、ご両親にとっては、なぜ僕なのか？そう思うのは当然のことだと思います。だから僕がいたら、ご両親に申し訳ないと思って。森さんが、お気を使ってくれて連絡してくれたときは、本当に嬉しかったです。ありがとうございます。

山下 どこで知り合ったの？

増田 …工場です。日清の。

山下 そう。

森 つい最近だった。久しぶりに長田から連絡があって、3人で飯食った。そう。

森 残念でした。

小林 行こうよ、今から。恭子のところ。それで、線香あげようよ。

増田 いいんです。また、機会をみて。

小林 よくないって。だって、恭子は、親のために生きてたわけじゃないでしょ？ひとりの人間として、生きてたわけでしょ？ついこの前まで。だから、いいんだよ、でしゃばって。でしゃばって、でしゃばって、でしゃばる！いいよ、なに言われても。

山下 飲みすぎ。

小林 だから、飲んでないってば。

森 誰が運転するんだよ。

小林 奈津子。

森 駄目だ。

小林 （山下に）鍵。

森 飲んでるだろ。

小林 たいしたことない。

森 駄目だ。事故でも起こしたら、洒落じゃ済まされない。

小林 …まじめすぎるよ、森くん。いつだってそう。その場のノリとか、勢いとか、いつだって理屈で抑えつける人。違う？

森 これのどこがノリ？勢い？全然話が違うだろ。常識だ。理屈なんかじゃない。常識の話をしている。

小林 鍵。

山下 駄目。森くんの言うとおりに。私たちがそこまで立ち入るのは、非常識すぎる。

小林 そんなに世間が大切？

森 当たり前だろ。

小林 さすが自民王国。保守の塊。変わることを恐れるのね。

森 ……(増田に)ごめんなさいね。みんな勝手に。

山下 いい加減にして！

小林 ……

磯部 増田さん。

増田 はい。

磯部 自分で決めたんでしょ？今日は、我慢するって。

増田 はい。

磯部 結論は出てるよ。俺たちがとやかく言う問題じゃない。

増田 ……申し訳ありません。僕のせいで、せっかくの楽しい時間が。

森 いえ。

磯部 あんまり、謝ってばかりも、よくないですよ。

増田 そうですね…今日はありがとうございました。

小林 楽しいわけないでしょ！これのどこが楽しい時間なの。

増田 ……

小林 もう恭子は死んだんだよ？いないんだよ？もう会えないんだよ？わかる？人が死ぬって、そういうことなんだよ。

増田 ……僕はみなさんが高校に行かれていた頃、少年院の中でした。だから僕には、必死になって自分のことのように意見を言ったり、言われたりする「友達」はいません。人を殺めるといことは、どんな理由であれ、許されないことです。この罪は一生背負わなければいけません。だけど孤独というのは、何より辛いものです。人が死んでしまうというのは、だから、僕にとって、「孤独」なんです。申し訳ありません。今日は本当にありがとうございました。

増田、立ち上がって、退場する。

増田 (見送ろうとするが) いいです。ここで。

森 でも、ちょっと道、狭いし、暗いから。

増田 大丈夫です。本当に。  
森 じゃあほんと、そこまで。

森の姿もなくなる。

磯部 よく来たよ。勇氣あるんだか、鈍感なんだか、よくわからないけど。

山下 ……

磯部 どうしたの？

山下 ん？みんな寂しい思いしてるんだなって。

磯部 ……まあな。

山下 恭子、ほんとに好きだったんだよ。彼のこと。

磯部 ……そうかも。

森、戻ってくる。

森 ……やっぱり、断った方がよかったかな。

磯部 そういうこと言うなよ。

森 電話があって、やっぱりちよっとだけ会いたって言われたから。

山下 なんて黙ってたのよ。

森 だって、ほら、タイミングがなくて。みんな緊張してもなあって。

磯部 変な気の使い方するな。

森 そうかな。

山下 そうよ。こういうことなら、きちんと会ってもよかったのに。

森 ごめん。

小林 だから、本当のことばかりだと疲れるって言ったのよ。もうやめよう、  
本当のこと言うの。嘘、あれもこれも嘘！嘘だけを喋ろう。

森 嘘はいらない。

小林 人は嘘をつく生き物なんでしょ？そう言ったよ、森くん。

山下 どういうこと？

小林 久しぶりに再会して、本当のことばかり言っていたら疲れない？だから、  
少しくらい嘘をついたっていいって思うの。必要な嘘だと思うの。

違う？

山下 なるほど。

小林 みんな嘘だっと思えば、気が楽でしょ？

山下 そうね。

森 よくわからないけど。

小林 だから言いたくないことも、言わなくていい。本当の話もしなくていい。見栄を張りたければ張ればいい。事実の何倍も誇張して話したって攻めてはいけない。

山下 言ったっけ？・・・私の子供、自閉症なんだ。

小林 ……嘘？

山下 もちろん。嘘だよ。

小林 ……

山下 医者から聞かされたときはショックだった。でもものすごく可愛い。まわりの方があたふたしちゃって、面白かったなあ。まあ、嘘だけでも。そっか。

山下 これでいいかな。攻めないよね、誰も。

小林 攻めないよ。そんな・・・

山下 嘘だって思いたいこともあるけど。だから、これは嘘の話です。

磯部 ……嘘だけだね、この話も、その、助けてもらいたい。金銭的に。

小林 ……嘘？

磯部 ああ。だから本気にしないで。だから、今日ここに来た。本当は、ちょっと騙そうと思ったりもした。投資の話とか、色々台本用意してきたけど、ついていいなら、嘘、つくよ。1万でも2万でもいい。ちょっと金を貸してくれないか。手持ちがないなら、振り込んでくれてもいい。多ければ多いほどいい。だから生活したら、いつの間にか借金が増えた。言っておくけど、その辺のカードでできる、甘い金額じゃないよ。

森 自己破産って方法もある。

磯部 だから、嘘だって。本気にするなよ。

森 全部、嘘か。

磯部 ああ。だから、気にしないでもらいたい。絶対になんとかする。自己破産なんて、そんなことで解決する話だったら、とっくりになっている。

森 なんて、正直に言わない。

磯部 だから、嘘だって。

森 いいよ、もう、そんなゲームは。嘘みたいな現実を、嘘だって言っとなにか変わるか？なあ、小林。これがお前が言う、嘘の中身か？

小林 ……

磯部 むなしくないか。誰だってそういう現実があるんだよ。嘘みたいな現実には生きてるんだよ。わかるか・・・聞いているこっちが不快だ。

磯部 さすが、教師。おっしゃることは、まさしく正論、非の打ち所がないとはまさにこのこと。

森 からかうなって。

磯部 じゃあ嘘はやめる。俺は今、みんなから金を借りたい。ただそれだけだ。別に思い出話なんてしなくなっただけいい。酒だつて別にいらぬ。必要なのは、金なんだ。さあ、これが嘘をやめた結果だ。どっちがいい？あのね、勘違いしちゃういけないから言っけど、本音でしゃべろう、なんていうのは、もうそれ自体が嘘なんだよ。俺たちが高校の頃よく言った、本音でやろう、信頼しようって言ったあれだよ。教師の中だけに、現実味の無い言葉なんだよ。これは、覚えておいたほうがいいと思うけど・・・（あたりを見回し）そういう目には慣れる。軽蔑するような、蔑（さげす）んだ目だ。

山下 そんなことないよ。

森 ・・・思ってもないこと言うな。

磯部 そんなことはない。ずーっと思つてたよ。ずーっと前から。

小林 嘘。そんなの。

磯部 ・・・嘘がよければ、嘘にするよ。まあ・・・どっちだっていい。どうする？金、貸すか？それとも、縁を切るか。

問

磯部 ちょっと一服してくる・・・考えておいてくれ。遠慮しなくていい。

磯部、出て行く。

山下 なによ、あれ。

誰も、なにも言わない。

山下 被害妄想の塊。

森 いない人のことを言うなよ。

山下 いいよ、言つても。これじゃ、恭子が可哀相。ダシに使われたみたい。だつて、磯部くんにとっては、別にどうだつていいってことでしょ？

森 ・・・

山下 こういう日に、そういう気持ちの人が近くにいるのは、ほんと、嫌。

森 （小林に）・・・いいのか時間。

山下 え？何時？今。

森 10時近い。

山下 ちょっと電話していい？

森 どうぞ。

山下、携帯電話を取り出す。

山下 (ダイヤルして) もしもし、ごめん。どう？そう。うん、わかった。

ありがとう。じゃあね。(電話を切って)

小林 大丈夫？

山下 うん、無事に寝たって。紀子は？どうする？時間、大丈夫。

小林 ……このまま「じゃあね」って気分じゃない。

山下 ……まあ。

小林 ちょっと、磯部くと話してこようかな。

山下 放っておけば？

小林 だけど…ちょっとだけ。

小林、いなくなる。

山下、おもむろに日本酒をコップに注ぎ、ぐびぐび飲む。

森 ちょっと、それ日本酒だよ。

山下 知ってるよ。

森 大丈夫かよ、そんな飲み方して。

山下 大丈夫。

森 飲めないんじゃないの？

山下 ……嘘ついた。本当は、旦那と3日で一升ぐらい飲むんだ。

森 マジで？

山下 マジで。

森 そう。

山下 しっかり、いかにも安酒って感じ。

森 日本酒なんて飲まないから、何買っているかわからなくてさ。

山下 料理酒に毛の生えたお酒よ、これ。

森 そうなの。

山下 朝帰るよ。一度寝たら、起きないし。明日は旦那も休みだし。森くんは？まだ夏休みでしょ。

森 ああ、

山下 ちょっといいかな、そういう感じで。

森 いいの？

山下 それとも、一晩ここで過したら、まずいことでも起きるかしら？

森 いや、たぶん、大丈夫。

山下 じゃあ決まりね。

小林、戻ってくる。

山下 ごめん。飲んじゃってます。

小林 え？飲めるの？

山下 まあね。

森 朝、帰るんだって。

小林 そうなんだ。

森 俺、あんまり飲んでないからさ、少ししたら送ってくから。

小林 うん。

森 磯部は？

小林 いない。

山下 いない？

小林 うん。

山下 コンビニでも行ったんでしょ。いいのよ、放っておけば。

小林 そうかなあ。戻りずらいかな。

山下 荷物だつてあるし、戻ってくるでしょ。

森 ちょっと、電話してみるよ。

森、磯部の携帯を鳴らす。

森 ……でない。

山下 鳴った？

森 いや、直接、留守電に。

山下 そう。

小林 電源、切っているのかな。

山下 自殺？なーんて。

森 やめろって。そういうの。

山下 ソーリー。

森 もう少し待ってみよう。ただ、コンビニ、行っただけかもしれないし。  
小林 ・・・そうだね。  
森 うん。

4

それから2時間がたった。深夜0時頃。

山下は深い眠りの中にいる。

森と小林が、向かい合っている。

小林 物理の時間だった。先生が、この世に永遠に続くものはないって、それは物理という学問が理論的にそれを証明しているって言った。

森 何先生。

小林 中野先生。

森 ああ、いたね。覚えてるよ。

小林 森くんはさ、修学旅行とか、なんか楽しい時間がこれからやってくるってとき、どんなこと考える？

森 それは、楽しむぞ！って、そんなことじゃないかな。

小林 私は、違う。楽しい時間が終わったあとのことを考える。行きの電車の中から、帰りの憂鬱の時間のことばかりを考える。ほんとに馬鹿みたいだけど、そればかり考えてた。何かはいつか終わるんだ、どんなに楽しい時間も、必ず終わりが来るんだって考える。だから、中野先生が言ったことって、ものすごく納得した。だから、物理を勉強しようと思った。

森 そうやって物理学科に進んだのに、今は役者か。面白いな。

小林 だけどね、それはあくまで物理の話だっと思うの。世の中のすべてが永遠ではないって証明は、物理にはできない。

森 例えば？

小林 例えば、人間の心とか、人との付き合いとか、目に見えないもの。永遠に続く友情の存在を物理は否定できない。

森 人の死は？死ねば終わる。そして人間は永遠に生きることはない。必ず死ぬ。

小林 それは、死というものの価値観の違い。死んでも続く友情だってあるかもしれない。繰り返すけど、物理学にそれは証明できない。

森 なるほど。

小林 私にとって、物理を学ぶことは、ひたすら永遠を考えることだった。高校の思い出と、そこで出会ったみんなとの関係は、いつか終わるのかって、終わるとしたらいつなのか、終わったあとはどうするのか、そんなことばかり考えていたの。

森 ロマンチストなんだな。

小林 ……だって、木から落ちるリングゴを見て万有引力を発見するだなんて、いかにもロマンチストだと思わない？ ニュートン博士は。

森 ……なるほど。

小林 うん。

森 それで、今はどう思ってる？ つまり永遠に続くものの存在についてだけ。

小林 うん。

森 どうですか。小林博士。

小林 ……私は信じるよ。うん、信じる。

森 素晴らしい。

小林 どうかな。

森 ……ちよっと眠くなってきたな。

小林 ……必ず帰ってくるよ、磯部くん。待とう。だから、帰ってくるまで。待っててあげよう。せめて、私たちだけでも。

5

それからさらに2時間くらい経過した。午前2時。

明かりがつくと、3人とも熟睡している。

中央に立つ磯部。

山下の鞆から、財布を取り出す。

磯部 だから、こういうところに、家族の写真とか、やめようよ。

磯部、財布を元に戻す。

続いて、小林の財布を取り出す。

磯部 ……(中身が少なすぎて笑う)

磯部、小林の財布も元に戻す。

磯部、最後に森の財布に手をかける。  
しばらく考えるが、森の財布から現金を抜く。  
そして、財布を元に戻す。  
自分の荷物を持ち、部屋から出て行く。  
しばらくして、森、起き上がる。  
じっと一点を見つめている。

6

朝が来る。

翌日の8時頃。

深い眠りの中に、森がいる。

夢を見ている。

現実より、もっと現実に近い夢を見ている。

やがて幕。